



日本学術会議 公開シンポジウム (参加無料, 事前登録不要)

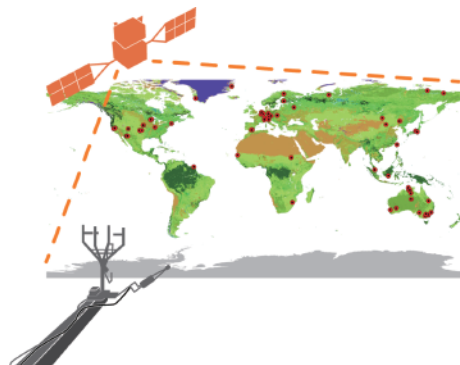
「環境変動にともなう生態系の応答を測る」

日時：2019年5月16日(木) 13:00～17:00

会場：日本学術会議講堂 (港区六本木, 乃木坂駅すぐ)

開催趣旨

森林や農地などの陸域生態系は、温室効果気体である二酸化炭素の吸収・固定により地球温暖化を抑制し、蒸発散を通じて気候を改善するなど、様々な環境調節機能を有している(生態系サービス)。一方、植物から放出される有機気体は反応性が高く、大気汚染の原因になることも知られている。しかし、地球温暖化や気象災害、また大気汚染、放射能汚染などの環境変動は生態系にストレスを与え、将来的には生態系の環境調節的な役割が期待できなくなるかもしれない。それでは、このような環境変動に対して生態系はどのように反応し、環境調節機能はどれだけ変化するのか? 将来の環境を正しく予測するには、環境変動に対する生態系の応答(反応)を正しく見積もる必要がある。本シンポジウムでは、植物のDNAから、葉、個体、生態系、あるいは土壌を対象に、様々な環境変動に対する植物・生態系の応答をどのように測るのか、測った結果から何がわかったのか、さらには得られた知見を地球規模に拡張した結果について5名の講演者に紹介していただき、関連した研究分野における研究の方向性などについて議論したい。



プログラム

13:00 開会挨拶 仁科弘重 (日本学術会議第二部会員, 愛媛大学理事・副学長)

13:05 趣旨説明 平野高司 (日本学術会議連携会員, 北海道大学 教授)

講演 (13:10～16:00, 休憩 14:40～15:00) 司会 平野高司 (前掲)

13:10 植物の環境ストレス影響をDNAで検出する

青野光子 (日本学術会議連携会員, 国立環境研究所 室長)

13:40 植物による反応性有機ガスの放出と環境との相互作用

谷 晃 (日本学術会議連携会員, 静岡県立大学 教授)

14:10 森林土壌は温暖化を加速するのか?

梁 乃申 (国立環境研究所 室長)・寺本宗正 (国立環境研究所 高度技能専門員)

15:00 地上観測ネットワーク, 衛星観測データを利用した陸域CO₂収支の広域推定

市井和仁 (千葉大学 教授)

15:30 植物のクロロフィル蛍光のリモートセンシング –細胞から衛星観測まで–

大政謙次 (日本学術会議連携会員, 東京大学 名誉教授)

16:15 総合討論 進行 平野高司 (前掲)

16:50 閉会挨拶 真木太一 (日本学術会議連携会員, 九州大学 名誉教授)

主催：日本学術会議 農学委員会 農業生産環境工学分科会, 環境学委員会 環境科学分科会

後援(予定)：日本農業気象学会, 日本生物環境工学会, 日本農業工学会, 日本農学アカデミー, 生態工学会, 日本リモートセンシング学会, JapanFlux, 大気環境学会

参加費：無料(事前登録不要, どなたでも参加できます)

連絡先：北海道大学・平野 (hirano@env.agr.hokudai.ac.jp)